

解 説

5月13日までは「ちょぼくれ」の一部だけを読み下して展示しておりましたが、今回はその全文を読み下し、若干の解説を加えてみたいと思います。

紀伊徳川家では天保（1830～1843）末年頃から、和歌山派（御国派とも）と江戸派との対立が表面化し始めていました。和歌山派とは、文政6年（1823）の大百姓一揆の責任を取る形で隠居しながらも藩政の実権を握り続けていた治宝を中心とする勢力であり、江戸派とは、江戸常詰め付家老安藤（田辺領主）・水野（新宮領主）等を中心とする勢力です。

この両派の対立は根深く、事ある毎に勢力争いが起こっていましたが、さすがの江戸派も治宝には表だって逆らうことは出来ませんでした。

ところが、嘉永5年（1852）9月に和歌山派の中心人物であった山中筑後守が、同12月に治宝が相次いで病没してしまいます。

この時、既に將軍家茂の補佐役になっていた水野土佐守は、ここぞとばかり和歌山派の根絶に乗り出します。石垣組武芸勧誘方を勤めていた高垣兵次郎が書いたと推定されている「幕末世情書留」（旧金屋町高垣八三氏所蔵 『和歌山県史』近世史料3所収）では凡そ「百三拾軒」余りも肅清されたと記されています。その中には本居大平の門下で、有職故実にも詳しくあった有名な長沢伴雄も含まれていました。こうした対立がこの「ちょぼくれ」を産んだ政治的な背景です。

さて、『小梅日記』の記述や『南紀徳川史』などによりますと、和歌山派に対する肅清劇は翌嘉永6年6月半ば過ぎには一応の完結をみえていますから、この「ちょぼくれ」の成立もこの年の6月の末前後と推定されます。さらに、これだけの長文を瞬時に写し取ることは到底無理ですから、誰が出したものは今の時点では全くわかりかねますが、恐らく「読売（瓦版）」のような形で発行されたものではないでしょうか。

また、この『雑記』の表紙には「キヨジツ取交写」と書かれていますし、この標題の前の部に「きよ言」と書かれていることから、小梅自身はこの「ちょぼくれ」にうたわれている内容は事実ではないと考えていたと判断するのが妥当かも知れません。

因みに、「ちょぼくれ」とは江戸時代の大道芸の一種で、その中でうたわれた俗謡のはやしことばを指しますが、上方では「ちょんがれ」と呼んだようであり、和歌山では「ちょんがり」と呼ばれていたようです。したがって、この「ちょぼくれ」は江戸で発行されたものかも知れません。それを何等かのかたちで、小梅が手に入れたものと考えればよいのでしょうか。

ところで、この「ちょぼくれ」にはどうしても意味の取れない部分もあり、また、「幕末世情書留」の記述内容と微妙に食い違ふところもあります。ですから、このような政治的背景を知るとはかえってこの「ちょぼくれ」の面白さを損なうことになるかも知れませんが、単に大道芸の一つとしてみるならば、勢いを付けてうたうように読めば様々な興味が湧いてくるものと考えられますので、敢えてここに全文を紹介して楽しんでいただきたいと思います。

（文責：当館主幹 須山）